

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2021.6.10 No.9

3つの学習会がスタートしました

前回のニュースレターでお知らせしましたが3つの学習会がそれぞれスタートします。具体化されたものをスケッチ風に紹介していきます。

● 人間の発達・成長・回復・ナラティブ研究グループ

HPで紹介しましたが、「ナラティブ」という実践方法について、じっくり学んでゆこうということになりました。カナダで「ナラティブ的探究」を推し進めてこられたクランディニンの本を原書で学んでみようということ、そしてそれと並行し、今、具体的にナラティブな実践や研究をされている方の報告を受け、学び合うということになりました。

【第1回】『Narrative Inquiry（ナラティブ的探究）』の読書会を開催

日時：5月15日第三土曜 10時

場所・方法：上田会長の研究室 オンライン・ハイブリッド開催

内容：『Narrative Inquiry』（Clandinin Connelly JOSSEY-BASS 2000）「概観」及び「1. Why Narrative?（第1章 なぜナラティブなのか）」

※会員外の方も含め8人の参加でした。参加者のひとこと感想は後述。

【第2回】6月12日第2土曜日 10時から上田会長の研究室にて（オンライン開催）

● 援助・教育実践研究グループ

学習会の具体案として、援助部会においてコロナ禍における、看護、福祉、教員養成現場における実習の中止や代替授業に伴う学生や実習指導者の戸惑い、苦悩や現状と課題について掘り下げ、問題点を領域ごとに解決すべき方策を見出すこと具体例などがあれば明示し提案します。

【次回予定】7月3日第1土曜日 10時から、東大阪大学にて（オンライン・ハイブリッド開催）

テーマ：対人援助職をめぐる学外実習の現状と課題（仮題）

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号：0798(45)9866

メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

【内容】1. 福祉現場における実習の状況（仮題）	中村又一
2. 大学における教育実習の課題（仮題）	今井美樹
3. 学校現場からみた教育実習の現状と課題（仮題）	高橋孝子

※ 3本の報告をもとに討議する予定です。報告は『臨床教育論集』第13号の依頼論文が基本になっています。

●援助者養成者グループ

様々な援助職養成に関わる者が集まり、養成実践している中での様々な課題や学生の実態、養成カリキュラムの問題点等々、日ごろ抱えている問題を出し合い、援助職養成のあり方を考え合う。定例研究会については、年間3回～4回の実施を目指す方向です。

自主ゼミグループの読書会

3つの研究会とは別ですが自主ゼミ学習会という読書会が会員の方が中心になって毎週第2土曜日5時から上田会長の研究室で開催されています。3つの学習会と同じように、どなたでも参加できます。

5月までは『学び直しの現象学』（岩崎久志著）を読み合いました。6月からは『どちらであっても』（徳永進著、岩波書店、2016）を開始予定です。

『臨床教育論集』木田編集長にインタビュー

○『臨床教育論集第13号』の進捗状況について教えてください。

12月発行にむけて編集中です。投稿論文などもいくつかあり査読体制にはいっています。今回の特集は、「対人援助職をめぐる学外実習の現状と課題」（仮題）です。教育・福祉・看護の現場からの依頼原稿、第15回研究大会のまとめの2つの柱が中心で、現場からの報告や文献紹介などが掲載される予定です。

○次に14号の構想についてお聞かせください。

編集委員会で検討中なのですが、コロナ禍における臨床教育学という大きな視点から考えています。例えば、臨床場面において、コロナ禍あるいはポストコロナなど、これまでとは違うスタイルを余儀なくされる中で、印象的なこと、感じたことをエピソード的に記述してもらい、原稿を依頼し、その後対談等でまとめてみてはと考えています。

○ありがとうございました。最後に会員の方に編集長からメッセージをお願いします。

2022年4月1日締め切りですがみなさんの積極的な投稿をお待ちしています。様々なご意見を編集委員会や事務局にお寄せ下さい。よろしくお願いします。

編集後記

コロナ禍になりZOOM会議が増えてきました。今回、武庫川臨床教育学会で総会の確認にそって有料のZOOMのアカウントを購入いたしました。会員の方が3人以上で自由に貸し出しができます。使用を希望される方は理事・事務局に連絡してください。便利なものは効果的に使用したらいいと思いますが、ZOOMだけで解決できないもの、対面でこそなしえるものをしっかりわきまえ、ZOOMオンリーにならないことが大切かなと思います。そう言いつつ、私はZOOM会議でパソコンが固まったり、画面が出なかったり、いくつか失敗をしました。5月の理事会もZOOMで行いました。遠方の方とお会いできるのも嬉しいことです。いい所を活用していきたいと思います。3つの学習会 みなさんの参加をお待ちしています。〈文責：吉益〉

シリーズ：私と臨床教育学⑦

臨床教育との出会いから「こども学」へ

吉岡 眞知子（東大阪大学）

私は 1973 年より 25 年間小学校教員として、多くの子どもたちに出会い、多くの保護者の方々とお話し、子どもたちがどんどん大きくなっていく姿に感動し、「子どもが生活するこの社会」について考えさせられることが多かった。学校での子どもの姿で気になることがあれば家庭訪問をし、直接お母さんやお父さんと話をしながら考えることは、私の予想もしない生活の現状があり、一人ひとりが違った環境の中で生きているということへの衝撃的な発見でもあった。「教育すること」は「子どもの人間形成にかかわる仕事である」と考えると、家庭、保護者、子どもが育つ地域社会との関係は重要なことであると考えようになっていた。一人ひとりの子どもは違った生活環境の中に居るのであり、だから一人ひとりの子どもの生活を理解することは、一人ひとりの子ども理解につながることを保護者と話しながら強く感じていた。

1998 年より現大学で主に保育者や教員の養成に携わり、「教育とは」を深め考えていた。「教育学」関係の文献を読みあさっている時、日本教育学会の「臨床教育学研究」の文字に目を惹かれ、それから「臨床教育学」と題する文献を読むようになっていた。それは、私が現場で実践しながら一般的に語られている「教育」「学校教育」の概念に違和感を抱いていたことを解明するための指針でもあるように感じたのである。例えば、堀尾輝久「人間形成と教育－発達教育学への道－」において「教育が人間形成の過程であること」を、田中孝彦「子どもの人間形成と教師」では、子どもの生活の現実、現場の教師の現実から「子どもを人間として育てる原点」を感じ、私が現場で抱いていた違和感の所在が見え始め、改めて「教育」について考えさせられる機会となった。こうして、大田堯、皇紀夫、和田修二、新堀通也、森昭、小林剛、矢野智司、岡田渥美、広木克行、河合隼夫等々の先行研究に学びながら、「人間形成」「子どもとは」「教育とは」「人が生きる、育つとは」をキーワードとして問い続けてきた。このような中で新しく発刊された「臨床教育学序説」（2002 年）は、私にとって、臨床教育学を考えようとする事への集大成としてのものとなった。

その後、特に、田中孝彦「子どもから出発し子どもに帰ることが教育実践と教育学にとって決定的に重要なことであり・・・子どもの人間としての成長を支える教育の実践・研究には、よりトータルな視野が必要ではないか」（「創造現場の臨床教育学」P14 2008 年）と言うことに共感し、私の「教育」への問いを追い続ける示唆を得ることができるのではないかと思うようになっていた。こうして、現在、日本臨床教育学会でご活躍されている方々との文献を通しての早い時期からの出会いがあり、「臨床教育学」との出会いとなっていったのである。

現在勤務する東大阪大学は 2003 年に 4 年制大学として開設した。そこまでは短期大学として地域に根付いていたが、新たに大学も設置することになり、私の提案でもある「こども学部」という学部を設置することになったのである。「子どもという人間をトータルな視野で探究する」目的で「こども学部」という名称にしたのである。2002 年、文部科学省への設置申請書の中の〈学部学科の特色〉には次のような文章を記載している。「子どもについて考えるには深く人間を理解していくことから始まる。『社会の中で子どもは育つ』ということ念頭におきながら、子どもの問題について探究し、研究していくことを基本とする。現代社会を考えたとき、子ども自身が健やかに『育つ』という本来持っている権利が保障されにくくなってきている状況がある。この問題は子ども『育てる』おとなが社会全体の問題として考えていくことが急務である。こども学部では、子どもについて探究し研究していくために、常に子どもの側に立ち、『その時代の社会状況の中での子ども』という視点で捉えていきたい。・・・」と。

本学で「こども学部」を創設するにあたり構想してきた起点は、「臨床教育学」という新しい学問を確立されようとしてこられた方々から私が学び得た「知」であったことを、今、改めて感じている。

会員投稿

(第1回「人間の発達・成長・回復ナラティブ研究グループ」の参加者に感想を聞きました)

- A 資料プリントを見て徐々に英語の辞書を出してきて調べました。刺激があっっておもしろかったです。
 - B アマゾンで原書を購入しようと思いましたが現在、品切れでした。私は原書はなんとなく読み飛ばして理解していましたが、今回のように精読していくと、色々と問いが生まれてきます。
 - C 院生時代に学んだ『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティー』を再読しています。ナラティブの世界をじっくり学びたいです。
- ※ 第1回の学習会に参加しました。石井副会長が主旨について最初に説明され、上田会長と英語がご専門の木田編集長が辞書を参考に翻訳されていきました。途中、オンラインの参加者にも呼びかけられ、双方で訳していきました。徐々に英語の勉強をして知的刺激を受けました。